図書館友の会
けやき
ニュースレター

けやき

44号
2014. 4. 25

◇特集　私のおすすめの本を紹介します
◇Topics 図書館で発表会

特集　私のおすすめの本を紹介します　読んでほしい本・18冊

好評の本の紹介特集です（次頁より）。けやき会員や左京図書館司書さんはじめ、けやきにご縁のある方々におすすめの本を紹介してもらいました。40年以上前から読み継がれて来た本から半年前刊行の本まで、時代や分野も様々な本が集まりました。ぜひこの紹介本を探しに図書館にお出かけください。目当ての本のそばには、さらに新たな本との出会いがあなたを待っていることでしょう。

TOPICS

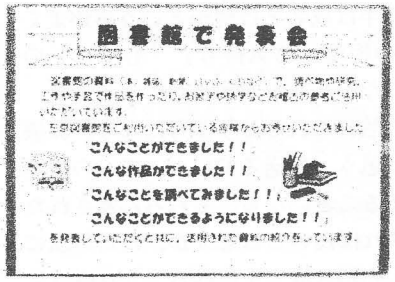
図書館で発表会

けやき主催・左京図書館共催

2月27日～3月24日

左京図書館の館内展示スペースにおいて，2月27日から3月24日の約１か月間に渡って、けやきさん主催の『図書館で発表会！』が開催されました。

この催しは，図書館が日々の暮らしや困りごと、自己啓発など様々なことで役に立つ施設であることをもっとアピールしたいとの思いから企画されたそうです。利用者の方に図書館の本を使って「できたこと」「やってみたこと」「調べたこと」などを作品の形にしてご提供いただき、館内に展示するもので，今年で４回目になります。



今年は、子どもたちが一生懸命調べたり実験したりしてまとめた「花火」や「色しらべ」「組み紐」「バレエ」「プリンづくり」の各レポートや、英語による海外文通の手紙や記録、津軽地方に伝わる刺し子技法「こぎん刺し」で作られたバッグや小物、飾り寿司製作の報告、今冬に宝ヶ池で出会った鳥たちの写真パネルなど、バラエティに富んだ作品計９点を展示させていただきました。また一緒に作品作りに使われた本や関連図書等の特別展示も行い、多くの来館者の方に手に取っていただくことができました。出展いただきました皆様、本当にありがとうございました。

これらの作品や本の展示がきっかけとなって、一人でも多くの方に図書館の有用性を知っていただき、暮らし中の様々な場面で図書館を積極的にご活用いただければ、大変うれしく思います。　　(左京図書館長　古川勝英)

＊今年度も、2015年2～3月に開催予定です。夏休みの自由研究や旅行や手芸・料理その他日常生活の中で活用された本等々、どんなものでも結構です。今から心に留めていただき、多数のご参加お待ちしています。　　(けやき事務局)

私のおすすめ本を紹介します　読んでほしい本・18冊

偶然の装丁家　就職しないで生きるには21

矢萩多聞著　晶文社　2014年

「ぼくは晴れて不登校児となった。」

晴れて不登校!?　さらに「明るい不登校児」という表現にニヤッとしてしまう。この本の著者タモンさんは学校に行かないで装丁家になった人。人の歩みってほんとにイロイロだ！

「目の前のことをやってきた結果、それが仕事になる」か、「なりたい職業や取りくみたいことを目指す」か、仕事とはそのどちらかだと聞いたことがある。タモンさんは前者のタイプ。学校を離れたことでインドに縁ができ、日本とインドをまたいで暮らしてきた。好きな絵を描き、それを売る、という暮らしのリズムがつくられ、ひょんな出会いから本づくりに携わるようになった。その時どきにできることを素直にやって、まわりとの関わりあいを大事にする。本書に登場するインドの言葉を借りるなら、目の前の状況に「アジャスト（調節）」しながら生きていくことで、「タモンさん」という人がかたちづくられたのだと思う。

いまここ左京区に暮らすひとりの男の生き様は、型にはまらず、ユニークで伸びやか。文章も飾ることない語り口で、ナチュラルな人柄そのまま。読者の心に自然と入ってきて、とても読みやすい。芸は、そして人柄は身を助けるね！本のつづき、タモンさんの今後が楽しみになった。

装丁家・矢萩多聞、絵本作家・ミロコマチコ、写真家・吉田亮人、注目の若手による美しいビジュアルワークにもご注目！　（林香澄）

みちくさ道中

木内昇著　平凡社　2012年

「みちくさ道中」の著者木内昇は、父親は仕事一筋、母親は家事と仕事と子育てに奮闘、家には本が一冊しかない、という家庭に育ちました。小学生時代はプロ野球巨人の黄金期。王貞治が756号ホームランの記録を打ち立てた頃でした。野球が好きで、ナイター放送が始まるとテレビにかじりつき、王が一本足打法を獲得するために畳が擦り切れるまで素振りを繰り返した、という話に感動し、毎晩家で素振りをします。が、畳は擦り切れず、仕方なくコンパスで畳を毛羽立たせて親に吊し上げられました。将来野球選手になる夢を抱いて地元の少年野球チームの門を叩いたけれど叶わず、野球選手の道は閉ざされます。

そのころ、初めて行った図書館で天井まで本のあるのを目にし、心躍り、一人で自由に愉しめる喜びも見つけた著者でした。しかしそこで文学一辺倒にはならず、中学、高校と運動部。しかも強豪チームで部活漬けの日々を送りました。大学も運動部、けれども中・高とは異なり様々なことを経験した大学生活を終えて、出版社に就職、編集者を経て独立、そして作家となった著者の初めてのエッセイ集です。

2008年から2012年の間に新聞や雑誌に掲載された約50篇が「まっすぐ働く」、「ひっそり暮らす」、「じわじわ読む」、「たんたんと書く」と4つのテーマにまとめられています。「まっすぐ働く」の中から一つ紹介しましょう。……高校卒業後25年程経って著者は当時の国語の先生が亡くなったことを耳にします。そして先生は著者の新作を病床で手にし、「これを読み終わるまで頑張らないと」と言いつつ闘病をされていたことを知りました。そのことから著者はこう言います。「自分の仕事が誰かの最期のときと共にあるかもしれない。それに恥じない仕事をする、と覚悟を持って臨むのもまた、『働く』ということの大事な構えなのだろう。自分のやりがい、ばかりじゃなくて。」と。

きうち・のぼり、1967年生まれ。1篇1篇から彼女の人柄、立ち姿が伝わってくるエッセイ集です。一気に読むのではなく、寝しなに1~2篇という読み方がお薦めです。

（会員・増井和子）

父の戒名をつけてみました

朝山実著　中央公論新社　2013年

以前から夫とは戒名はいらない俗名でいいと話しているが、それが実際できるのか、また自分でもつけられるとはどういうことかと興味が湧き読んでみた。

葬式仏教と言われるように日本では葬儀は仏式で行い、それにともなって戒名がつくのが一般的である。島田裕巳著『戒名は、自分で決める』を読んだ著者は自分の父の死に際して自分で戒名をつけ、檀那寺の住職からは常識はずれだ、故人が浮かばれないし墓にも入れないと激怒される。揉め事は葬儀だけでなく法事や親族間の遺産相続問題まで勃発する。

前半は実体験ルポ。後半は戒名とは何かという事がよくわかる。戒名や葬儀代の相場「お気持ち」「心づけ」の額、葬儀屋さんの探し方などヒントが示されている。又、「お坊さん」の実態にも触れられており参考になる。葬儀はあったほうが良いとは思う。見送る側にとって心の整理がつき故人とも向き合えることになる。もちろん残されたものがやり易いようにやれば良いとは思うが、ただ無駄にお金をかける必要もなく心から故人を偲べるような儀式になるようにしたいものである。　（左京区・中島佳代）

できればムカつかずに生きたい

田口ランディ著　晶文社　2000年（新潮文庫　2004年）

私だってできればムカつかずに生きていきたい。それなのに日々親や子、まわりの人たちにムカつきながら生きている。

子どもの頃から自分としっくりいかない、上手く生きられないと悩み考え続けた田口ランディが「思春期の夏休みの宿題」と称して綴るエッセイに、ムカつかずに生きていくことなんかできるものかと猜疑心を胸に手を伸ばしてしまった。そんなに私は自分にも他者との関係にも疲れていたのか。

挑戦的なタイトルで人間関係をテーマに言葉を発信し続ける彼女を、自分は繊細なのに他者には大胆な言葉を投げかける、細い腕で大きい鉈を振るう人だとイメージしていた。

しかしこれは田口のいう「疑惑の編集」だ。「人間は編集する生物で自分という主観をもとにありとあらゆる出来事を編集し整理しながら生きている。」のだそうだ。確かに。

編集の仕方は人それぞれだ。私は自分で編集した自分や他者や未来や社会の中でムカついて生きている。

読後、他者との距離に悩みながら恨みや呪いを乗り越える「まっすぐな言葉の模索」をする田口ランディを、細い腕で白い布を一生懸命ふっている人だと再編集した。

本書ではこれを「愛による編集」というのだが、愛は少し恥ずかしい。　（あわあわ）

すゞしろ日記

山口晃著　羽鳥書店　2009年

新聞の書評欄で「すゞしろ日記　弐」という本が取り上げられているのを読み、すぐに私は図書館の検索に走った。調べてみると、当然のことだが“壱”にあたる「すゞしろ日記」というのがあることがわかり、予約も3人入っていたが、ためらうことなく、まず待つことにした。

ちょっと忘れかけてきたころに手にした本は、とにかく意外なものだった。いったい私は書評の何に反応して、何を期待していたのだろう。少し大判な本の表紙に薄墨色で大きく描かれた大根を見て、「あっ、すずしろって大根か」とはじめてきづいた私。ぱらぱらと中をみると、落書きのような絵と流れるような手書きの文字。字の多い漫画である。ゆるい感じはあるが、ちょっと入りにくい。国内外で絵師として歓待される様子がこと細かく描かれている巻頭の挟み込みを読んでいくうちに、付き合いきれなくなっていったんは閉じてしまった。

ところがところが、やはりすて置きがたいものを感じ、再び手に取り書き込みをじっくり読んでみると、鼻持ちならないと感じた話はすべて画家である著者の妄想だったとわかる。挟み込みは展覧会用に制作された元祖すゞしろ日記であり、『大根という野暮ったい響きを、すゞしろと美しげに言いかえる様に、味気ない日常を賑やかしく妄想する侘しさを題に託した』そうだが、虚実ないまぜの妄想にすっかり振り回され、果ては著者の世界にはまってしまう。

メインは東京大学出版会のＰＲ誌『ＵＰ』（ユーピー）に毎月1ページ掲載されていたものの4年2ヶ月分（50回）である。こちらは妄想世界ではなく、面白き事もなき小市民の日常を描いているそうだが、旅行記あり、軽く流さず語られる絵画論あり、おつれあいとのスリリングなやりとりあり、合間にポチの出演ありと、どの回も美味しく、1回分読むごとに残り少なくなるのが惜しい。幸いまだ“弐”が控えている。ゆっくり味わいながら”参”を待つことにしよう。　（K．O）

火山のふもとで

松家仁之著　新潮社　2012年

読書家の知人から勧められて手に取った本、地質学の本？　はたまた紀行物？　との推測は大きくハズレた…

1980年代初め、浅間山の壮大な風景をバックに、若き建築家が勤める設計事務所の仕事を通して、建築に関するあれこれが丁寧に描かれている。

所員達から尊敬されている所長の仕事ぶりや業界の事情、建築の歴史を軸に、主人公の青年の恋、彼の周辺の人々それぞれのエピソードが物語られる。どの登場人物も豊かな感性と言葉で魅力的だと思った。含みのある文章がそこかしこに　ちりばめられ、読書する醍醐味を堪能させてくれます。

事務所の静けさ
暖炉で薪の燃える音
庭の鳥たちの囀り
コーヒーやパンの香り
夏の軽井沢の木々や生き物の様子…
五感に訴えかけてくる物語でもあります。

細部まで考え抜かれ、手の掛けられた作中の建物は、何れも機能と美しさを合わせ持っている物として描かれ、実際見る事の出来ないのを残念に思いました。

また、控えめに物語られる幾組かの人々の恋愛が想像に任されているのも面白いと思った。

著者、50代にしてのデビュー作とは思えない無駄のない、それでいて余韻を感じる作品です。

なーんて、評論家気取りで感想を認めてみましたが、ここまで書いて読み手の感性を試される本かもしれないと気づきました。

読後しばらく経った今も、あれこれ思い返し、本を読む楽しみを味わっています。　（愛知・T・A）

一の糸

有吉佐和子著　新潮文庫　36刷改版　新潮社　2007年

今年の4月の大阪公演、5月の東京公演を最後に7代目竹本住大夫が引退する。89歳の人間国宝の引退の弁は「芸に納得のいかないことが増えた」だった。

文楽は大夫（義太夫語り）と三味線、人形遣いの三業が綾なす総合芸術。ユネスコ無形文化遺産に登録されている。

徳兵衛が弾く一の糸の響きに魅了された茜は、家人の厳しい監視をかすめ、公演先の大垣まで追いかけ、二人は結ばれる。しかし、徳兵衛には妻子がいた。

それから20年。独身を通した茜は、旅館を営んでいた。ある日、常連客が連れを伴い深夜に帰還。茜が挨拶をして顔を上げると、そこに徳兵衛がいた。妻を亡くしていた徳兵衛は求婚。茜は妻と同時に9人の子どもの母となった。

空襲警報が響く大阪の朝日会館。文楽を中断して一座と数名の観客が身を寄せて地下に避難していた。「どうせ爆弾が落ちたらここにいても死ぬのだから」と宇壺太夫が言うと、一座はまた舞台へ上がっていくのだった。

芸の意地から文楽と決別した徳兵衛の文楽復帰第一回公演は、宇壺太夫との芸の対決の様相を呈した。徳兵衛の三味線は鬼気迫り、殺気さえ感じさせたが、茜の言葉に、はっと悟る。名人上手といわれる徳兵衛がさらに芸を深め、明鏡止水の境地を得た。ぶん廻しがぐるりと廻り、徳兵衛が茜に微笑みを投げかける。そして…。

けっして失いたくない愛しいものを有吉佐和子が描き切った。文楽への愛惜が胸を打つ。文楽は歌舞伎と違い門閥のない完全実力主義の世界。大阪市長の注文に負けずに、芸を守り抜いてほしい。　（かねちゃん）

漢古印縁起

陳舜臣著　講談社　1978年（中公文庫　1989年）

表題作を含め６篇が収められている。そのすべてに共通するものは古美術。絵画、漢代の古印、刀剣、古陶磁など。それらの一つ一つにまつわる好事家と「私」との語らいが、読者を古代と現代を往還する楽しみにいざなう。

なかでも『漢古印縁起』を、特に面白く読んだ。寧波の豪商范家の子孫が発見した埃に塗れた銅印百数個。先祖の日記から三年間逗留した丁敬の習作と推測した子孫はある計画を思いつく。これらを漢古印として蒐集家に売りつけることであった。計画通り王祺明という老人に売りつけることに成功する。この話を知人から聞いた「私」に、印章蒐集家の見せたものが、正に王祺明が范家の子孫から買ったものだった。銅印には、二百年前の范家は古漢印のコレクターとしてその道の人に知られていたことを記した文書も添えられていた。俄かに売却したものが本物であった可能性がうまれた。

丁敬が刻した物は習作なのか、贋作なのか。范家の子孫が発見したものは祖先が蒐集した本物だったのか。そのようなことも興味深いが、丁敬の姿勢からもっぱら実用だった漢印に美を発見した後代の人達を想像した。好事家と「私」が「恥春翁」と刻された印を見ている場面がある。「恥春翁」とは金農（清代の文人）で、刻したのが同時代同郷の丁敬。そして印材は魂が吸い寄せられるほどの潤いを持った田黄。篆刻に触れたことのある人ならば、今眼前にその印があるかのような喜びと身震いを感じるのではないだろうか。　（会員・仏手柑）

カブキブ　1、2

榎田ユウリ著

角川文庫　角川書店　2013年（2はKADOKAWA刊）

表紙の絵を見るとすぐにわかるのだが、このタイトル、漢字で書くと「歌舞伎部」。カタカナにすると韻を踏んでいて東京ブギウギ的な響きに聴こえるが、実は歌舞伎の話なのである。（すぐにわかるって？）古典芸能に興味がない方でも大丈夫。

主人公は高校生の来栖黒悟。通称クロという少年。祖父の影響で歌舞伎が大好きなクロは学校で歌舞伎部をつくろうとする。

しかし、そのためには最低でも５人の部員を集めねばならないという。そこから部員集めの奮闘が始まる。なんといってもクロがつくりたいのは歌舞伎鑑賞などというものではなく、歌舞伎そのものを上演しちゃおう！というものなのだ。もうそこで、無理じゃない？衣装は？舞台は？となるのだが、なんとクロはやってのけるのだ。

最初はまだ同好会だが、集まったメンバーがいい。それぞれが個性的で魅力的。演劇部のスター、浅葱先輩や、身体はごついが心は乙女な花満先輩。パソコンに強い親友のトンボ。中でも私が１番気になるのは阿久津くん。歌はかなりの音痴だが、どうも生い立ちに秘密があるようで･･･本物の梨園の御曹司もでてきて、これからの展開が楽しみな青春小説である。　（左京図書館・丸尾）

星のかけら

重松清著　新潮文庫　新潮社　2013年

「星のかけら」というタイトルと表紙に魅かれて、この本を手に取りました。そして、読み終えた後、「さすが重松清さんだ！心の描写が見事！また泣かされてしまった！」と思いました。

「星のかけら」とは、噂で、これを持っていると、嫌なことやキツいことがあっても、しっかり耐えられるというお守りになり、しかも誰かが亡くなった交通事故現場に落ちているらしい。いじめにあっている小学六年生のユウキは、「星のかけら」を探しに行った夜に、不思議な女の子フミちゃんと出会い、命の意味に触れ、少しずつ成長して

いく少年たちの物語です。

現代の社会問題をテーマにしていますが、エールをくれるキーワードが散りばめられています。「生きてる人は、みんな自分の力で歩いて行かないとだめなの」「生きてるってなんかすごい」「昨日と違う今日、今日と違う明日」「自分の足で歩きだしたことを星のかけらのまばゆい光がお祝い」「頑張りなさい、生きているんだから」…こんな言葉を読んでいると背筋が伸び、私も毎日を一生懸命、大切に生きていこうと改めて思えました。

また、読み手の立場（親目線、子ども目線）が変わると、自分の重ね方、感じ方が違うので、親子で同じ本を読みあってみるのもいい機会になると思います。

（松ヶ崎・M・Y）

柘榴のスープ

マーシャ・メヘラーン作　渡辺佐智江訳
白水社　2006年

アイルランドの小さな村バリナクロウにペルシャ料理の店が開店します。美しいイラン人の三姉妹が営む「バビロン・カフェ」シェフは長女のマルジャーン。三人に好意を寄せる人、敵意を抱く人。店はうまくいくのでしょうか？

各章の始めにイラン料理のレシピが載り、レシピにそって話が進みます。

聞いたことも無いメニューと様々なスパイス、どんな味やにおいがするのでしょう？頭の半分で料理を想像しながら読み進めると、三人のつらい過去が少しずつ明かされていきます。

柘榴のスープはどんな味がするのでしょう？子どもの頃、近所の家の庭になった実をよくいただいて食べました。固い皮からのぞく透明の赤いつぶつぶは、さっぱりとすっぱかった。スープに入れるとどんな風味になるのでしょう。

姉妹は、また一緒に柘榴のスープを食べる日があるのでしょうか？

バリナクロウでいつまでも心穏やかに平和に暮らしてほしいと願わずにいられません。　（左京区・亀井）

心のナイフ　上下　混沌の叫び1

パトリック・ネス著　金原瑞人・樋渡正人訳
東京創元社　2012年

人類の新しい入植地となる予定の星の小さな村、プレンティスタウン。謎の病のせいで女たちは皆死んでしまい、男たちはお互いの考えが筒抜けになってしまう「ノイズ」に侵された。最後の子ども、トッド・ヒューイットはある日村のはずれで「静寂」に出会う。それは出会うはずのない人間の女の子だった―。

ひとつの出会い、そして13歳の成人の日が迫る中、やがてトッドは星をめぐる抗争の中心に巻き込まれていきます。

争うということ。奪われるということ。傷つけるということ。人類の歴史の中で幾度となく繰り返された「正義のための戦い」を、作者はＳＦ作品として見事に描き出しています。そして物語の中で何度も読者に問いかけます。大人が言っていること、していることは本当に正しいのか。現実から目をそらさず、正しい選択ができるのか。憎しみを抱えながら、人はどうやって生きていくのか。

容赦ない出来事が何度も決断を迫りますが、主人公のトッドはいつも正しく選択できるわけではありません。自ら傷つき、時に不本意ながらも他者を傷つけてしまいます。中途半端な同情心で相手の怒りを買い、そして自分の気持ちすらあやふやになっていくのです。それでも、信じることのできる大切な人との絆を胸に、正しくあろうとするトッドの姿に大きく感情を揺さぶられました。

恐怖と絶望を突きつけられながらも、ページをめくらずにはいられない。この圧倒的な面白さをぜひ体験してください。　（左京図書館・夏秋）

本作は３部作です。「問う者、答える者　上下」（混沌の叫び２）、「人という怪物　上下」（混沌の叫び３）と続きます。

オレがマリオ

俵万智著　文藝春秋　2013年

私のお勧めの本は、「サラダ」と「缶チューハイ」の歌人といえばたぶん誰もが知っている俵万智さんの最新歌集です。前作から九年、東日本大震災後の歌とそれ以前の二部構成になっています。

震災後に詠んだ『子を連れて西へ西へと逃げてゆく愚かな母と言うならば言え』という一首。子を心配した行動が愚かだと言われたのでしょうか。住んでいた場所から離れた人、離れられなかった人、この一首の陰に子を守りたいと思うたくさんの親たちの葛藤が見え隠れしているように思えます。

全編を通して素晴らしいのは、万智さんの息子さん♪。日々の生活の中での子どもの言葉を歌に詠み込んでいます。石垣島での生活で『「オレが今マリオなんだよ」島に来て子はゲーム機に触れなくなりぬ』と詠んでいます。タイトルにもなっている一首です。自分がマリオか、子どもの感性ってすごいなぁ。息子さんの言葉を拾いながら感心しきりです。あとがきの中でも、電子書籍の説明を聞いて、便利だけどマンガをめくるときの顔に感じる風が好きなんだ、などと言う。私は親戚のおばちゃんにでもなったような気持ちで、彼の成長が楽しみです。

生きていくこと、死、母としての日々、もちろん万智さんの真骨頂である恋の歌も満載の最新歌集です。なんといっても一首は三十一文字、そばに置いて写真集みたいに眺めるように読んでほしいです。どんな写真と巡り合えるのかは、その時の自分次第です。　（うし柄）

黄色い葉の精霊　インドシナ山岳民族誌

ベルナツィーク著　大林太良訳
東洋文庫　平凡社　1968年

黄色い葉の精霊。現地の言葉でピー・トング・ルアング。またの名をムラブリ族。タイとラオスの間の山岳地帯を縦横無尽に移動しながら、狩猟生活をしていた民族です。彼らは、バナナの葉で作った簡素な住居で生活し、他の民族との接触を避けていました。黄色く変色したバナナの葉の家とたき火の後の灰だけを残して、森の中を風のように移動していくため、数十年前まで謎の民族とされ、黄色い葉の精霊と呼ばれていました。

本書は、世界的に有名なオーストリア人民俗学者夫妻が諸民族を調査するため、1930年代に東南アジアを旅した記録です。ムラブリ族を調査するため、案内人のミャオ族やラオ人、そして、ムラブリ族たち自身と共に生活をしながら、森を進んでいきます。現地の民族が偉大な森から恵みを受け、ときに森を恐れ、人間の力が及ばない事象を精霊に尋ね、森と共に生きていた様子がいきいきと描写されています。一方で、当時の西欧人の西欧中心の価値観、文化や自然に対する姿勢も文章に如実に表れており、興味深いです。

著者が調査を実施してから70年以上経った現在、ムラブリ族は消滅の危機に瀕しています。彼らの家である森は破壊され、社会も変化し、漂泊の狩猟生活の継続は困難となり、定住生活を余儀なくされました。多様な価値観の存在を再認識し、様々な犠牲の上に成り立っている私たちの現在の文化、発展、豊かさとは何か、再考するきっかけを与えてくれる一冊です。　（斉藤）

岩手県ポラン町字七つ森へ　宮沢賢治への旅

和順高雄文　中里和人写真　偕成社　1995年

「イーハトーブとは、…ドリームランドとしての日本岩手県」であり、「わたくしのおはなしは、みんな林や野原や鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです」と宮沢賢治は自身の童話について書いています。著者は、賢治作品に使われている、岩手の風土からの数かぎりない精髄（エキス）を見つける旅へとでかけます。岩手とイーハトーブの巨大な幅の中にはなにがあるのか……。

表紙には青空にまっしろな雲、裏表紙には幾万年をこえ砂粒になる小石。石に宇宙を観、雲と風に透明な力を感じた賢治が、天と地の間に存在するありとあらゆるものの中に見た精髄とはどれほどのものだったでしょう。中には、1ページごとに美しい写真です。小岩井農場、出穂の稲、甘そうな赤ツメ草、牛舎でねそべる猫、雪解けの下の落ち葉、満開のりんごの花、春の山……。童話や詩に登場する、七つ森（『山男の四月』）、狼森（『狼森と笊森、盗森』）、岩根橋（『銀河鉄道の夜』）、イギリス海岸（『春と修羅』）の景色も広がります。眺めていると、いつか、景色はこちらがわを包みこみ、その地に私をおりたたせています。写真に添って展開される作品解説は、意外にも現実に深くかかわっていた賢治をみせてくれます。のみならず、賢治の代弁であるかのように、今を暮らす私たちへのきびしい文明批評ともなっています。

今では広く知られた東北方言「じぇじぇじぇ」ですが、著者が、人々の会話に『鹿踊りのはじまり』の鹿の会話を重ねた時、鹿もきっと「じぇじぇじぇ」と言っておどろいているにちがいないと、音さえ聴こえてくるのです。また著者が、旅の終わりの種山ケ原で、賢治の原っぱへの希求についてひらめいた時、それはまさに古代日本人のインスピレーションそのものではないかとはっとしました。賢治には、環状列石を遺した縄文人の空間感覚が深く息づいていただろうと確信させられるのです。

風土をありのままに受け入れ、縄文まで根源を求めて賢治を理解しようとする姿勢がこの本にはありました。
（M）

雨ニモマケズ　Rain Won‘t

宮沢賢治文　アーサー・ビナード英訳　山村浩二 絵
今人舎　2013年

今更と言われるの覚悟の「雨ニモマケズ」です。そして絵本です。でもこれは明らかに子ども向けの絵本ではありません。大人がきちんと受け止めるべき絵本です。

アーサー・ビナードは大学卒業と同時に来日。2001年第一詩集「釣りあげては」で中原中也賞を受賞した詩人。

「Rain Won’t stop me　　Wind won’t stop me」

と始まる英訳本文の下段に、ルビ付きの日本語も掲載されています。

そして、アニメーション作家である山村浩二の殆どモノトーンに近い鉛筆画で1931年の賢治が生きた頃の日本の風景が描かれます。21世紀の日本とは余りにかけ離れた、当たり前過ぎる位当たり前だった里山。生き物がいっぱいの田んぼと畑の暮しが其処には在ります。「わすれていた？」と問いかける言葉に私たちは虚を突かれる思いがします。

あとがきでは　―「今ニモマケズ」―　執拗に破壊された自然、賢治の親しんだ生き物たちは駆逐された。この今から、「雨ニモマケズ」がうんと近い、当たり前の生態系になる流れを、今のぼくらがつくらなければ。―　と結ばれる。

2013年童心社刊の「さがしています」で、広島の原爆

資料館の14個の物の声を拾った異国の詩人の想いに、今を生きている私たちは、何を応えられるのだろうか。

「立ち止まれ！」と叱咤する声が聞こえてくるような絵本です。　（会員・ねこまま）

被爆アオギリと生きる

語り部・沼田静子の伝言

広岩近広著　岩波ジュニア新書　岩波書店　2013年

特に心に残ったことを拾ってみる。

①結婚式三日前に被爆。逓信局の瓦礫の下敷きになり左足首を皮一枚残して失う。真夏の猛暑で傷口は、膝まで腐食し大腿から切断。麻酔もなくノコギリで。

②被爆者や障害者への差別や偏見に遭う。そんな時職場の中庭の焼け焦げたアオギリが新芽を見つけ励まされ自殺を想い留まる。

③1981年、アメリカの原爆記録フィルムを買い取ろうという『10フィート運動』の試写会があり、片脚姿の22歳の自分がいた。同席の被爆者の説得もあり、被爆体験を伝える使命に目覚める。※1982年11日間の強行日程で6カ国11都市を回り、各地で『にんげんをかえせ』を上演し、核兵器の廃絶を訴えた。またアオギリの前で修学旅行生たちに雨の日も風の日も証言を続ける。

④軍国少女として軍都広島から出征兵士を見送った兵隊がアジア各地で女性や子どもまで虐殺していた事実を知り、被爆者・被害者としての立場だけではなく侵略戦争を起こした加害者の側の国の人間として謝罪し、平和について訴える。

⑤2011.3.11 原発事故を老人ホームのTVで知った沼田さんは医師から安静を求められても5.14核兵器廃絶の総会に出席しマイクを握る。「被爆国だからこそ原発はいらない。」しかし8.6集会には出席できず、11月87歳で永眠。

原爆と原発、戦争と核、その反対運動に生涯を捧げた姿から教わることが数々あり、ジュニアにも薦めたい。

（会員・ 中川徳子）

東日本大震災石巻災害医療の全記録

「最大被災地」を医療崩壊から救った医師の７カ月

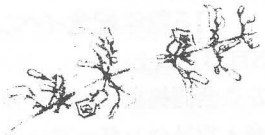
石井正著　ブルーバックス　講談社　2012年

宮城県石巻赤十字病院の一外科医であった石田氏が「災害医療コーディナーター」に委嘱されて、１月後、東日本大震災が起こる。

取り敢えず、石田氏の行動が圧巻である。全国から駆けつけた3633の医療チームを統括し、300余りの避難所からのニーズに対応し、急性期を過ぎてからは、地元医療機関の再生支援を行った。ぶれない方針で臨んだ各対応、著者を支えた人々、そして感謝の心などが心を打つ。

活動を支えた要因の１つに、いつ起こるかわからない災害に対する備えだったということも、興味をそそられる。災害救護の部長に任命されてから、警察、自衛隊、海上保安庁をはじめとする行政機関に出向き、顔の見える関係を作っていったこと。合同訓練を実施し、お互いの組織や動きを理解した連携が構築されていたことが災害時の作業を円滑に進めている。また、民間企業と事前に横のつながりを大事にされていたことが、よりきめ細やかな活動に結びついたことも分かる。

理系の専門知識を持った人が読む本だと思っていたブルーバックスを手にできたことが少し嬉しい。ドキュメントとして読んでみてください。　（会員・城野裕紀子）



けやきの本棚 44　私のおすすめの本

ズッコケ発明狂時代

那須正幹作　ポプラ社　1995年

ぼくは、この本を読んで、登場人物たちが、まるでぼくの夢を実現しているような感じがしたので、この本が気に入りました。それは、この話に出てくる一人が、ぼくがしてみたいような発明をするところです。このズッコケシリーズは、これ以外にも全50巻あるし、また、この登場人物たちが大人になった話である「ズッコケ中年三人組」というシリーズもあるので、ぜひ読んでみてください。

（小５・窪田捷人）

魔女がいっぱい

ロアルド・ダール作　クェンティン・ブレイク絵

清水達也・鶴見敏訳　評論社 1987年

この本は、ロアルド・ダールの作品の中で一番好きな本です。年に一度の定例会で、魔女たちの秘密の計画を知ってしまい、ネズミにされてしまった主人公の『ぼく』。秘密の計画を食い止めて、仕返しをしようとする、ちょっと皮肉で、本当にありそうな物語です。この本を読めば、いろいろな人が魔女に見えてくるかも？

（下鴨小６年・関本鼓太）

けやきの活動 14年1月～4月

1/上旬～　ニュースレターNo.44号原稿作成・編集
2//27～3/24　「図書館で発表会」
2/28　左京区ボランティアグループ連絡会に出席（増井）
3/上旬～　「えほんのひろばinきょうと」準備
4/18　「えほんのひろばinきょうと」の絵本の展示準備、面展台搬入
4/19　子ども読書の日記念事業おたのしみ会に協力
4/19.20　「えほんのひろばinきょうと」担当、会場でブックトークも
・1/25.2/22.3/22.（第4土曜）図書館おたのしみ会に協力
・1/24.2/28.3/14.4/25
絵本学習会（第4金曜日、3.7.12月は第2金曜日）
・1/7.2/3.3/3.4/7.
事務局会議　原則第1月曜日）
図書館とのミーティング
・1/9.16.23.30.2/6.13.20.27.3/6.13.20.27
4/.3.10.17.24.
絵本コーナーで'あかちゃんに絵本を'
サポーター活動（毎週木曜10:30－12:00）

◆図書館友の会 けやき の仲間になりませんか◆

知りたい、調べたい、本の世界を楽しみたい
そんな私たちの望みをかなえ、
一人一人の世界を豊かにしてくれる場所
それが私たちの願う図書館です

左京図書館が今後もこのような市民みんなの図書館としていきいきとあり続けるために、私たち市民利用者は何ができるのか考え、活動したいと1999年に「けやき」を立ち上げました。
図書館のスタッフとともに、左京図書館はじめ京都市図書館を支え、育てていきませんか。

次のような活動をおこなっています

であいの森
左京図書館のおたのしみ会（毎月第４土曜日11:00）に協力。
絵本を読んだり、ブックトーク・人形劇やおはなしも。

「赤ちゃんに絵本を」サポーター
毎週木曜日10:30～12:00、左京図書館絵本コーナーで絵本探しのお手伝いをしたり、絵本を読んだりしています。

誰もが利用できる図書館を考える
図書館の現状を調べ学び、図書館に提案をしています。

ニュースレター編集部
友の会のニュースレター「けやき」を作成し、図書館と利用者を結ぶけやきの活動の情報を発信しています。

事務局
けやきの活動の企画提案。図書館行事に企画・協力。各グループ間や左京図書館との連絡調整を行っています。

絵本学習会
毎月第４金曜日10:00～。取り上げた絵本をみんなで読み合い語り合う楽しい学習会です。

講演会・学習会
主催または図書館との共催で年に数回、地元の講師を中心に様々な興味深い講演会・学習会を行っています。

◆入会希望の方は、年会費500円をそえ
下記事務局または郵便振込口座にお申し込みください。

事務局　京都市左京区高野東開町1-23　26-101　永井方
TEL/FAX 075-721-2625
郵便振込口座　口座番号　００９２０－８－１５６９１４番
口座名称　図書館友の会　けやき
◎ゆうちょ銀行の口座をお持ちの場合、口座間振替で無料で送金できます。
年会費はニュースレターの印刷および郵送費の一部に充当します。
◆活動費のカンパも歓迎。直接又は上記の振込口座をご利用下さい。

けやき情報版

❒ 絵本学習会

時：毎月第4金曜　午前10～12時
3、7、12月は第2金曜
所：左京図書館の上３階会議室
テーマを決め図書館から本を借りその場でみんなで読み合っています。読んでもらう喜びが味わえ、新たな発見も生まれます。とっても楽しい集まりです。5月は23日、テーマは「ことば遊びの絵本」です。どなたでも、どうぞ気軽に、ご参加ください。

❒講演会「子どもと絵本を楽しむ～最近の絵本を中心に～」

講師 土居安子氏
（大阪国際児童文学振興財団主任専門員）
時：5月30日(金)午後1時30分～
所：京都アスニー第2研修室
問合せ：京都市子ども文庫連絡会
kyotoshikorenn@yahoo.co.jp

❒ 左京合同福祉センター 15周年記念イベント

時：5月 31日(土)
所：左京合同福祉センター1F
老人福祉センターホール
左京図書館が、新築された左京合同福祉センターに移転開館して15周年、けやきが提案した、糸あやつり人形劇団みのむしの人形劇の上演もあります。詳細は、4月末より配布のチラシで。

編集後記

▽本の紹介特集では、本との出会いをはじめ、味わい方や読後の余韻、読書で得られた内省や現実世界への視点も語られています。原稿を寄せて下さったみなさまありがとうございました。読書の楽しみ、本がもたらしてくれるもの、そして本の世界の豊かさを改めて感じることができました。（き）
▽左京図書館が現在地に新築オープンして１５年、わが図書館友の会けやきも活動を始めて６月で１５周年を迎える。一身の丈にあった、自分たちにできることを、続けることを心がけてきたつもりだが、１５年を経て自身の体力知力の衰えを痛感する。図書館を取り巻く環境が年々厳しくなって行く中、新たな仲間が力をくだることを切に願う。（り）

◇けやき　第44号　2014年4月25日
◇制作　図書館友の会 けやき　ニュースレター編集部
題　字　高野のYさん　タイトルバック　岩倉のＳさん
カット　高野のＨさん
◇発行　図書館友の会　けやき
京都市左京区高野東開町1-23-26-101永井方
TEL/FAX 075-721-2625